



平成22年8月23日

卓話 『森美術館「ネイチャー・センス展」の紹介』

森美術館チーフ・キュレーター

片岡 真実 様

今年度、森美術館で開催する3本の展覧会は、展覧会を通して日本を再定義するということで、すべて日本人アーティストで構成しています。今日ご紹介するネイチャー・センスは日本人の自然観がどのように現代のアーティストの作品に登用されているかを見ようというものです。展示は3名のクリエイターによるもので、その1人はインダストリアル・デザイナーの吉岡徳仁です。彼の作品は雪とか風、水、結晶といったキーワードで説明できます。雪とか風といった自然現象の中にある美しさ、形として定型化できないものを提示することで感動を伝えることを心掛けています。

日本人は自然をどのように見てきたかという、日本書紀や古事記では宇宙の混沌から天と地が生まれ、そのあと高天原に現われた神々に続いて、石とか土、水、風といった自然神が登場します。縄文、弥生の時代からすでに自然崇拝の原始神道が存在し、自然の中に何者かの存在を感じるということがあって、これが多神教的な信仰に繋がるかと思うのですが、この考え方の中では、意志も人格も無く空中を浮遊しているような精霊もいて、善意でも悪意でもなく人に付着して幸いをもたらしたり害を与えたりします。それが妖怪として認められ、室町時代の百鬼夜行絵巻のように、ある夜、妖怪が集まってパレードをするというような話が昔からありました。私のお気に入りの妖怪の「ぶるぶる」は、暗い夜道を歩いていてブルブルっと身ぶるいするようなとき、実は首のところからスーッと入ってきているのだそうです。このように皮膚感覚で触知す

るような状態がそのまま妖怪の名前になっているものもあります。

気候風土による自然観の違いについて、1920年代、和辻哲郎が本を書き、世界の風土を3つに分けています。日本が属するモンスーン型の特徴は湿り気で、雨は農作文化にとって恵み。それが時折恐ろしい力に変わっても受け入れざるを得ないということで、非常に受容的な人間を作り、アフリカや中近東の砂漠型は常に自然界に死があって、水などは取り合いになるので闘争的な人間性が培われると言っています。その両方を総合したものがヨーロッパ、牧場型ですけれども、例えばギリシャのような太陽が燦々と照って空気が乾燥しているようなところでは妖怪は生まれないと述べています。

岡本太郎は縄文文化について深い研究をしていて、縄文の狩猟期に生きた人間の感覚は極めて空間的に構成されていると言っています。獲物の気配を察知し、的確にその位置を掴むために、当時の人たちは鋭い空間的な感覚を備えていたというんですね。その空間感覚が、今、この近代化された都市空間の中で、また鋭敏になり始めている。このような流れの中で3名の作品をご覧いただいて、空間の目に見えない部分、我々が元々持っていた野生の自然を知覚するような能力を呼び覚まして空間を体験していただければと思います。

